

會



報

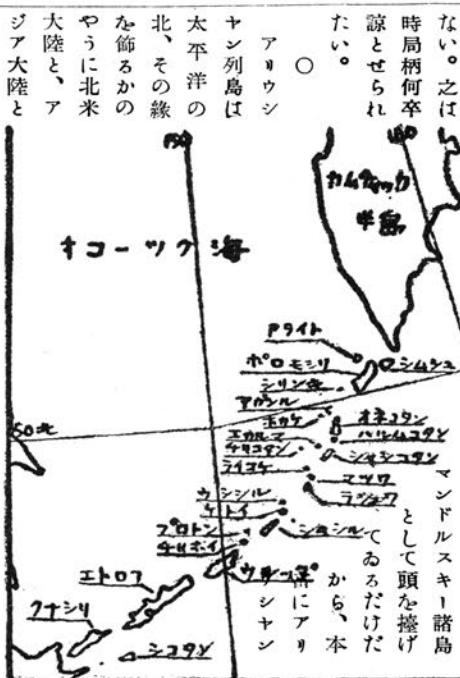
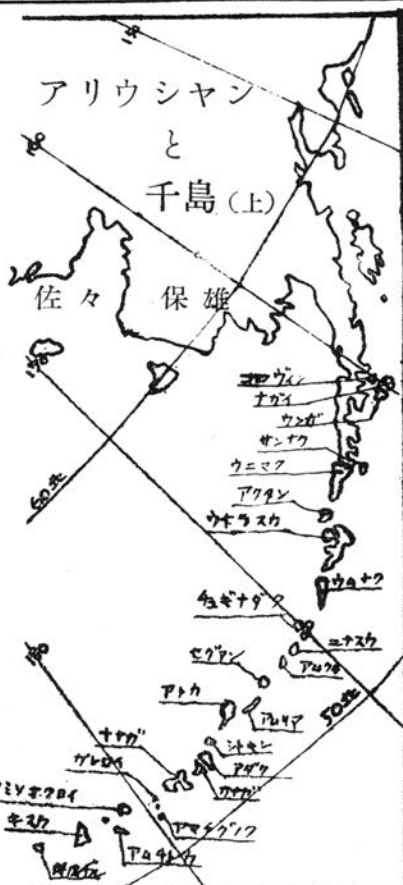
昭和17年5,6月

117

日本山岳會

嘗ては、北海の濃霧の深いといは
るの彼方の世界のやうな氣がして
ゐたアリウシヤンの島々も、「十
二月八日」のその日以来、俄かに
我が千島列島からつい目と鼻の間
のやうに感じ始めた人は、決して
少ないであらう。また、山好き
の者は、南のニューギネアやジャ
バの山々が氣になると同じやう
に、この北の島々にはどんな山々
が聳えてゐるのだらうかなどと、
思つて見たに違ひない。一寸手近
の地圖を擧げて見ても、千島より
は遙かに長大だし、又より北にあ
るから氷河でもないかな等と考へ
て「北の山」への憧れに胸がうづ
くやうな氣がした者もあつたかも知
れない。

近頃、どの家の居間にも飾られ
てゐるに違ひない太平洋の地圖を
更めて見る事としやう。太平洋の
西から北にかけて、夜會の壁を飾
る花綱にも響えられた弓なりの列
島が、美しく大陸を縁どつてゐる
事は、誰しも奇異の感を抱く事の
一つに違ひない。ヒリッピンから
臺灣への孤狀、琉球の列島、本州
の全體の格構もそれだ。併し何と
言つても見事なのは我が千島列島
と、アリウシヤン列島の二つの弓
なりだ。このやうな美事な孤狀列
島がどうして太平洋に向けて張り
出てゐるかと言ふ最も興味ある問
題には入る事を一先避けて、今
は、取り敢へず、この「アジアへ
の懸橋」であるアリウシヤン列島
がどんな自然を持つか、或はどん
な山が聳えてゐるかをのみ探る事
としやう。又その大いさや其他な
手軽く見當つる爲には我が千島
と比較する事が便利だと思ふの



で、その對
比を試み乍
ら話を進め
る事とする
但し千島に
關してはそ
の諸數値は
殆ど發表す
る事が出事
ない。之は
時局柄何卒
諒とせられ
たい。

アリウシ
ヤン列島は
太平洋の
北、その縁
を飾るかの
やうに北米
大陸と、ア
ジア大陸と

目次

- ◇アリウシヤンと千島(上)……
……佐々保雄… 1
- ◇東印度諸島主要山岳高度表Ⅱ
……ジャバ島… 8
- ◇冬の富士について……
……廣瀬潔… 5
- ◇積雪期木曾駒の黒川本谷(上)
……跡部昌三… 6
- ◇會員通信(富田健一、中村謙、
安江安宣、名須川渡)… 3
- ◇圖書紹介(山征かば、わか山わか溪
臺灣山岳第12號)… 3
- ◇會務報告、その他

列島と呼べるべき部分はその孤狀の全長の半ばに近い一七〇〇軒に過ぎない。しかも千島列島の一二〇〇軒に満たぬよりは五割方長く、地球上、最も美しい孤狀列島に属する。その位置は、東經一七二度から西經一六三度迄あり、北緯は五〇・五度から五五度迄、最大幅二〇〇軒に及ぶから、我が千島の終る北端から始まると言つてよく、稍々、北に寄つてゐる事になる。

全列島の島々は大小を合すると一五〇に及ぶとも言はれ、中、目星しいものだけでも四〇に及び、千島の大小合せて三〇有餘よりは、大分桁違ひに多い。列島は西からニーヤ、ラツツ、アンドレアーク、四山、フォックスの五群島に分れ、アンドレアークとフォックスの二群島に大きい島が多い。

最大の島は最東端の、アラスカ半島と一衣帯水のウニマク島で、三二四〇平方軒あるが、我が千島の最大島樺提島に比べると大して大きな譯でもない。因みに千島列島も多くの地圖ではその一隅に、縮尺を違へて小さく描いてあるから、その島々も微々たるものに過ぎないだらうと思ふのは全く素人考へで、五萬分之一地形圖をつなげば、一枚大の長さになる島も二三はあるし、船でその沖を航海す

れば、勿論船足の遅いせいもあるが、朝にその島を彼方に望み、夕漸くそれを後ろに送ると言つた意外に大きな島もある。

ウニマクに次いで大きいのは有名な海軍根據地ダツチハーバー近くに持つウナラスカ島(二三一〇平方軒)で、我が列島第二の島幌筵島より稍大きい。以下ウムナク(一七三〇平方軒)アトカ(一二二〇平方軒)アツツ(九二〇平方軒)等があり、つまり面積千平方軒以上が四つ、百平方軒以上が二一もあるに對し、千島では千平方軒以上の島は上記の外國後島、得撫島等あつて計四を算へるが、後援續かず。百平方軒以上は僅か六つに過ぎない。従つて、アリウシヤンの全列島を合せた總面積は一、五〇〇〇平方軒となり、我が四國よりは稍小さいが、千島全體よりは約五割近くも大きい。

次に列島の氣候を見ると、所謂亞極地式氣候帯に属するが、列島なので海洋性氣候を呈し、濕度稍大、年較差は左程著しくない。特に冬は千島や樺太に比べると寧ろ温和とすら言ふ事が出来、最冬でも月平均は零下二・三度、最低で零下一五度だから、札幌や紗那よりも冬は餘程暖い事になる。併し夏は月平均一三度内外が一般で、

最高でも二〇度を越える事を稀とし、この點では、千島でも、北千島に近い夏を有すると言へる。但し東西に長い列には東西の差は左程著しくなく、例へば東のダツチハーバーと西のアツツとでも、全年平均、四・六度と三・八度則ち一度前後東の方が高いに過ぎない。従つて年平均氣温から見ると札幌よりはかなり寒く、紗那や幌筵にかなり近いものになる。年降水量は東方が餘程高く全年二〇〇〇耗を越え、西でも一五〇〇耗内外、千島よりはかなり多い。しかもなほ全體から見ると千島と氣候的には左程違ひ譯ではなく「長い秋と短い冬」で形容される、夏らしい夏のない一年で、無降雪期は六、七八の三ヶ月、冬の残雪は六月末迄深々と谷間を埋める事が多いと言はれてゐる。又霧日数は北太平洋の常として甚だしく多いがなほ北千島ほどのことはないらしく、冬の結氷も列島沿ひでは殆ど之を見ずたゞ春先に一部の流水が近づくのみであると言ふ。

この様な氣候の下では植物も亦その著しい制約を受けざるを得ない。その最も見るべき特徴は森林樹種の少い事で、列島何處にも木らしい木まで求める事が出来な

い。僅かに谷間に矮生の柳の灌木が散點するに過ぎず、千島に多いミヤマハシノキやハイマツは全然認められない。この植物景觀がアラスカ植物區系に属するが東亞植物區系に属するかはフルタン博士と館脇博士の間の所説の異なる處であるが、館脇氏にすれば「樹のないアラスカ植物景觀」と言へば一言にして要を得るとの事である。則ち寒帶式植物景觀で、河邊には所謂ツンドラ式の濕原が、又山腹から山麓にかけては所謂高山植物の草原が一面に横がり、雪融を追ふて七月の候の漸く暖い日差しに一齊野も山も一面にお花畑を展開すると言ふ、おほらかな斜面に紅紫黄白色とさまざまに地上天國を現出する美觀は一度之を千島で味はつた者には、このアリウシヤンのそれは更に強い魅力で以て惹きつけるものがあると思はれる。

以上の様な大いさや其他の違ひはあるにしても、その外貌が然るやうに、その地體構造的な特徴には又、極めて類似性のある事は當然とも言へるが注目する。則ち兩列島ともその延長こそ違へ、共に南に張り出た緩い孤狀を呈し、共にその主延長部を主帯と呼ぶとすると兩端の南側には外帯とも呼べるべき部分則ちアリウシヤンに於けるコヂヤクやシユマジンの諸島、千島に於ける色丹列島

があり、弧狀列島の構造的特徴を現はしてゐて面白い。又何れも東側は稍自由に展張してゐるのに對し、西側へは一はカムチャツカに、一は北海道に略々直角に近く相會して來てゐる處も似てゐて造山帶會合の一型式を示してゐる。又その地質を見ても、多少の新舊の差こそあれ、何れも火山噴出物に富む第三紀層を所謂基岩とし、又之に前後して噴出した諸火成岩が相伴つて露はれてゐる。之等は第三紀を過ぎて一旦かなり低原に迄侵蝕されたらしく、今日でもなほ所々に緩やかな斜面を展げて殘つてゐる。兩列島を火山列島として特徴づける諸火山は、之等を基底として、その上に噴出堆積したもので、兩列島とも、山らしい山は多少成立に前後の差こそあれ、すべてこの種の火山に屬してゐる。しかもその多くは所謂圓錐火山で、端麗な姿を北の空に畫いてゐる。又その大部分は今何所謂活火山として噴煙をなびかせ、噴火の記録の航海表によつて記されてゐるものが、甚だ多い。特にボゴスロフの噴火毎の變貌は千變萬化驚くに堪へたものがある。海岸は之等の山や丘を切つて峻しく屹立し、暗い蔭を抱く斷崖の打ちつ

つくを常とする。

信 通 員 會



八 甲 田 雜 感

富 田 健 一

今シーズン初の山行を八甲田山に撰んだ。途中鎌倉で深田、石兩岳兄に會ひ翌三月七日夜上野發急行で津輕の國へ向つた。二年續いて四度び北海道へ渡り乍ら此處へはつゞ立寄れなかつたのが今回漸くその優麗な山姿に接し得たのである。一二月は毎年出難く今年は早く出た方が八甲田は、數年雪量が減り気温も少しづゝ高くなつてゐるやうで樹木なども大きなものは出来てゐなかつた。寫眞や映畫でもみるやうこの山は全くスキー向きな山であるが八甲田は有名にしたかの聯隊遺跡がスキー

使用前の事件と承知し乍らも矢張りあれから受ける概念的影響は避けられなかつたのかそのシンブルさに期待外れのものを感じへさせられた。之は酸ヶ湯といふ根據地が餘りによすぎるせいばかりではない。一五八四といふ低高度でもあるが同じ東北の山でも蔵王の峨々側からでは相當スキーテクニクを要するし又吾妻連山では可なり山深く入つた感じを抱かせられるが八甲田はその何れをも有しない。或ひはそれが却つてこの山の特徴なのかも知れない。日本海より太平洋へ抜ける娛しい強風に吹かれ乍ら山頂に立てば風のせいかに視界に展がる津輕海峡の潮の香が感じられたり岩木山の純白の姿が馬鹿に秀麗に見えたりするのである。南八甲田と呼ばれてゐる櫛ヶ峰の方が登高感と與へるが之も荒川と迷岱といふ廣いシゲビートを押込んで向ひあつてゐる爲め八甲田は八つの甲鎧の山を並べてはゐるのだが(大岳、小岳、赤倉、井戸、石倉、田茂范、難、高田大岳)何處か孤立した氣分の山だ。

大岳に登頂した日は丁度三月十二日。前夜怪しげなラヂオで知つた戦捷第二次祝賀日だったので頂上で日本萬歳を唱へ皇軍の武運長久を遙かに祈つた。起伏する津輕の山河、青森の街に左右から迫るやうな兩大海を俯瞰した時、對米英戰の今、一しは祖國日本我等が國土といふ強き感銘に打たれた。その翌日には迷岱を横きりバツカイ澤と赤水澤の間の尾根を眞直ぐ登つて櫛ヶ峰へ向つた。前日もまして強くなつた風、二月の暖風にゆるんだ重い雪も別に從來の經驗以上のものでは決してなかつたのにこの日は私が登山を初めて以來最もへばつた日であつた。晴天を逃すまいと炭火による風邪を押して出かけたの、後で知つたのだが少し脚氣が出てゐた爲だつた。石倉岳からこの邊りにかけてのさざ松、樺、ぶな、ならの美しい疎林の間を縫つてゐるさ今は雪に埋れてゐるつゞじ、かへで、はぜ、さばぐるみ等が綾なす秋の紅葉頃の見事さが想像されこの山を開いた大町桂月が懐しく浮かび上つてくるのであつた。

この酸ヶ湯には山の神様と呼ばれる名物男鹿内辰五郎老が時々下の横内から上つて来て登山家の話の相手になつたりコースを教へてくれる。古色蒼然たる團服の上に種々な徽章を佩用し日獨の國旗迄胸に並べ一沫の雅氣を漂したこの山男から素朴な津輕言葉を受へつゝ八甲田の隅々に渉る話をして貰ふと實に楽しい。私は丁度宅からの知らせで豫定を早めて歸る事になつた夜、上つて来た老人に會つたのでゆつくり話を聞けなかつたが雪の降る日或ひは山にのびた日の徒然に數十年に亙る永き山歩きを追憶を聞けば随分面白い事、變つた事があらうと思はれる。現在六三才だが五二才よりスキーを始めたそう。この人は非常な高山植物愛護者で濫伐者からは勿論植物同志の蠶食即ち自然的な壓迫からも之を守るべく辛苦したそうである。苦勞話には頭が下る。何が高山植物であるかさへも心得ぬ登山大衆が深い研究心もなく群衆心理や好奇心で之を手折る事を思ひ合すれば山へ登る人々に登山道徳、山岳知識の具備は是非要請したいし指導者達が文化的な面を忘れた補導にのみ傾く事にも注意して頂かねばならない。新人の教育は難しい事だけに一層完璧を期すべく各方面から之を導き練る事の肝要さはひびり軍事、學問、産業戦線のみに限らず登山界に於ても同然であらうと思ふ。

津輕言葉には全く參つてしまつた。わからないのだ。インゾコミいふ子守唄はわかつたがもつと身近な會話が解せないのだつた。馬槌の事を聞いた時も先方のいふ事が完全にのみこめず多分こうだらうと想像する事にも自信が持てず結局半分は自らの判斷に任すより

書 圖



介 紹

逗子八郎著

「山征かば」

昭和十六年九月十日中央公論社發行、一八×一二・五種、三八二頁、圖版口繪共十一、二圖五十錢

第一部前線の山、第二部登山隨筆、第三部新なる登山精神、と三部作の時局向一石三鳥を望んだやうな單行本であるが、著者の如き時代の脚光に照らし出された人にしては、視ひ所が多岐に過ぎた感がある。第二部は書名からすれば寧ろ無くもなである。第一部と第二部は別々又は一緒にしてもよいからともつとつかりと網まれてゐたならば、更に特色のある出版物となつたであらう。巻末記を見るに、著者の編纂動機は明かに區別すべき二つの公私要素であつたやうに思ふ。然し乍ら「前線の山」には動かされる文章詩藻の幾つかを見出す。嘗ての自由主義的登山時代には考へられなかつた戦時戦場登山行動の嚴肅な場面に

仕方なかつた。この馬橋に就いて
 氣をつけねばならない事、それは
 青森から八里の距離にある酸ヶ湯
 は三月に入ると炊事具布圍持参の
 湯治客を本格的に扱ふやうになり
 その爲めに一日一回定期に馬橋が
 數臺出るのだが、之がスキー客の
 利用する大阪東京からの夜の急行
 (何れも午前七時半前後到着)に聯
 絡しないで出てしまふ事である。
 僅か三十分の相違で夜行に疲れた
 體にリュックとスキーを負つてこ
 の八里の山道は一寸辛い。

身延から

七面山・八絃嶺へ

中 村 謙

兼れてから一遍訪ねたいと念
 願してゐた身延から七面山・八絃
 嶺へ行つて参りましたので其感想
 を一寸御報告させて頂きます。

バスを降りて先づ久遠寺を訪つ
 れましたが丁度お務めの眞最中
 で、いつも乍ら日蓮信者の熱心な
 のには敬服させられます。三光堂
 經由奥ノ院・追分と辿りましたが
 行きかふ人々も必ず「御苦勞様」と
 云ひ、中々感じがよく、道は信仰
 の山だと思ひました。

七面山遙拜所跡の赤澤峠を降つ
 て遙か脚下に赤澤の部落を俯瞰す
 る山村風景は全く印象的なものが

有ります。手打ちの蕎麥が特に
 いしかつたです。

七面山の上りは急坂相次ぎ、相
 當なものでした。最も感の悪か
 ったのは敬慎院の門番共です。こ
 れで日蓮も地下で哭するだらう
 と思ふほど情落し切つて居て、少
 なからず憫情を催しました。

七面山の頂上から八絃嶺に到る
 間は林木鬱蒼として眺望に恵まれ
 れぬのが残念です。でないと南アの
 こよなき展望台でせうに……。之
 に反し八絃嶺の(一九
 一八米)頂上丈けば素
 晴らしくよい眺めです。



櫻ヶ島温泉は旅館一
 軒で室は五十ほごある
 そうですが、丁度二日
 休みの爲めか超満員で
 した。湯がぬるいので
 少くとも三十分以上は入湯する爲
 立派な浴場もあふれるばかりの盛
 況でした。中々趣が有りますから
 確かに一訪の価値があると思ひま
 す。

翌日は安倍川を新田まで降り、
 それより草木澤沿ひに草木越え
 (獨標一四七九米、安倍峠とも云
 ふ由)をいたしました。全般には
 大した難路ではありませんが、峠
 附近は一寸慣れないものには不向
 きの難路です。峠の手前にある崩

れは「横薙」と稱する由、この附
 近と、峠下の大崩れを突破するに
 は相當の苦勞を伴ひます。雨の降
 つてるさきとか、軽いハイキング
 の氣持では沖も無理でせう。峠か
 ら望む東面の眺めは中々捨て難い
 ものが有ります。この附近で有數
 の十枝山と篠井山の中間には、天
 城の峰巒が望見され、つゞく富士
 愛鷹、箱根の山々の美しさは全く
 一幅の畫にも譬へることが出来る
 でせう。櫻ヶ島温泉から南部まで
 丁度一日の山旅です。山櫻やツツ
 ジや山吹が色とりとんに咲いてあ
 って中々美事でした。

南の空を想ひて

安 江 安 宣

軍隊生活に漸く慣れ始めた頃、
 残念ながら病を得て、去る二月以
 來當院に入院致して居ります。會
 報によれば近々東印度の研究なさ
 れる由、誠に時宜に適した結構な
 御企てと存じます。皇軍の赫赫た
 る戦果は我々の夢を意外に早く實
 現させさうに思へますし、一昨年
 夏京大で計畫しましたニューギニ
 ア探検のため我々で蒐集しました
 文獻は相當に上り邦文のみにても
 二百以上になります。邦文のもの
 は殆んど参考になりません。最
 近九大の金原教授が紀行をまとめ

て「ニューギニア探検」(養賢堂)な
 る一書を出されましたが、同地方
 に關する唯一の單行書と云へませ
 う。

關領東印度の山を御調べになる
 なら Atlas van Tropisch Nieuw
 and といふ實に立派な地圖帳がオ
 ランダ王立地學協會より出版され
 て居ります。馬東群島中四千米以
 上の高山は英領北ボルネオのキナ
 バルを除いては全部ニューギニア
 に限られて居り、此のニューギニ
 アの地圖で最も信頼すべきは Mo
 の New Guinea 三巻の附録地
 圖であります。南洋經濟研究所か
 らは蘭印製の地圖を複製して「蘭
 領ニューギニア地圖」として發賣
 して居り、又同所からは「ニュー
 ギニア地名辭典」を出版して居り
 主なる山岳に就いても一通り述べて
 あり信頼すべきものだと思ひま
 す。東亞研究所からはニューギニ
 ア文獻集が出てゐます。(四月三日)

春の山

名 須 川 渡

去る四月二十五、六日の連休を
 利用して額田敏氏と一緒に上越の
 毛度澤に露營し、仙ノ倉と萬太郎
 へ行つて來ました。

桐生高工小屋附近から雪は連續
 して残つてゐましたが澤が埋つて

あふ。文獻として見ても、我々が
 等閑視するわけではないが大山脈
 又は極地地方の山々に勉學の時を
 奪はれて研究の餘裕無き隣國の山
 河を事やさしく説いてもらつた事
 を感謝しなければならぬ。新高
 山やタロコ峽が、海南島の南山嶺
 や五指山や南支の經浮山などと同
 様前線の山扱ひされてゐるのは、
 長年南方に住んでゐた評者として
 は奇異であるが、一般内地在住者
 の通念では、大東亞戰爭發展の今
 日と雖ども、まだ無理からぬ所か
 も知れない。最後に第三部中の「日
 本運動界の再編成」に著者は指導
 的重心を置いてゐられるやうだが
 其の論旨其の理念に今日何人と雖
 ども反對する者は無い筈で、登山
 の立場からいへば日本登山道確立
 でなければならぬ。只世上往々
 にして狭量な論議實驗には閉口し
 てゐる人格者も少くないと思ふ。
 此の意味に於て著者の大道に歩す
 る第三第四の新作を期待するもの
 である。
 (沼井生)

冠松次郎著

「わが山わが溪」

昭和十七年一月十五日墨水書房
 發行、一八×一二・五種、四十四
 (十三)一六頁、圖版一二、二幅六十
 錢。

るのはシツケイ澤出合ひから上の様です。然し渡渉は何とか避けることが出来ました。

仙ノ倉も萬太郎もその頂上は雪がすっかり消えて道松や石楠花がいも蔦となつてくれました。惠まれた快晴に奥利根の山々ばもとより遠く白馬連峰や富士までも望まれました。赤谷川の源流は未だに豊富な残雪に蔽はれて眞黒な萬太郎谷とはよい對照をなしてゐました。名刺を持つてゐなかつたので萬太郎の頂上の小さな名刺箱にコケモ、の一茎を入れました。頂上の近くでもう鶯が頻りに囀つて居り澤では雪解の水が音を立てゝ走り樹々の若芽がふき出してゐます。里近くの小川は満々と湛えて到る處路を横切つてゐました。

× ×



冬の富士に就いて

廣瀬 潔民

近代富士登山史を氏の數十年に渉る富士研究の一端としてお話し願つたがその概要を簡記する(關西支部第六回研究會)

一、初登頂時代(明治廿年代)

文獻に現れてゐる古いものを拾へば萬葉に雪の富士を詠んであり常陸風土記に於ては筑波山を賞め富士を讃へてゐる。頂上目指して登つた人にも宗教的、大衆的、科學的その外維多利亞山のある事が冬富士の特徴である。明治廿五年五月ホルダムとウエストンが強力三人つれて白人として春の初登頂をしてゐる。同年十二月に寶永山を調へ廿六年も大宮口より登つてゐる。ウエストンは海と山の景色を兼備した冬の富士を賞め歐洲アルプスにも見當らないと言つてゐる。ピツケルを初めて持つて來たのもウエストンで五月の富士で使つてゐる。冬の富士に初登頂した

野中至氏は氣象研究家で廿八年一月四日普通の靴。カシキナで五合目に迄到着。二月十六日にピツケルまがひの物を使つて登頂に成功してゐる。次いで有名

な野中氏の滯頂生活が同年九月十二日より始まり後に夫君教授に登山された千代夫人の芙蓉日記が「小國民」に發表されそれを文士落合直文が「高嶺の雪」と書改めて出版(明治書院、二九・九・二五)したが之等が高山岳知識の普及に役立つた事相當である。

二、大衆的登山勃興時代(明治卅、四十年代)

水島長次郎(スポーツ的登山)は外人の眞似をしてスキーを登高に利用し明治四十五年頃から大正八年にかけ毎年二月頃登つてゐた。

長谷川玄一(宗教的登山)は日本力行會會員で今でいふ心身鍛鍊を盛んにやり明治四十年一シーズに九回登つてゐる。二合目で雪崩の爲め死んだ。

「新雪雪崩は大規模のものなく、風成雪雪崩も少い。春の底雪崩が大きく寶永山の東側、砂灘地帯によく出る。天保五年七合目邊で二七〇〇米の高差の大底雪崩を起してゐる。大體五合目邊りから森林地帯に及び面積が廣い。富士に於て雪崩の出る時の特異性を擧げると南風吹き非常に暖い時、大雨のあつた後、頂上の氣温が五十度位に上つた時(三月初より四月中旬頃等である)。

他にレルヒのスキー登山が行はれてゐる。

三、中間衰退期(大正中期)

北アルプス方面に關心が募り暫く忘れられた時代である。

四、氷雪技術登山時代(大正末より昭和初)

昭和五年田中眞三氏が吉田口に幕營し初めて氷雪技術を練習した。富士方面に用ひられたアイゼンの形狀を調べて見ると大體直線組合型、樹枝狀派生型(歐洲方面のもの)があり前者には格子型、椅子型、井字型、十字型があり我國に於て割合古くより利用されてゐる。過冷却氷の状態は吉田口八合目に於てよく見られ十一月割合に多く四月が最も顯著である。突風豫知は無樹地帯だけに非常に困難であり冬富士登山家には怖るべき障害物である。室戸颱風の時は午前三時三三米、六時四九米、十一時六十米、その後風力計が吹きとばされて正確には知られないが百米近くはあつた様子。風と氷への細心の注意は富士に於て最も肝要なものである。

(富田記)

冠氏のわが山、溪、といふからには黒部を中心にした地域かと思つたら、さに非ずで、序文に記されたやうに一昨年の秋から約一年の間に著者の書いた富士主題其の他の紀行隨筆三十八篇、溪の話は「溪の話」一篇中に黒部川と吉野群山に源を發する北山川との比較觀賞がある位で、あとは各篇中に散見し、嘗てのやうに谷の饒舌に疲勞せしめられない代りに、書名と照らし合せて物足りなさを覺えざるを得ない。尤も其れが出版界に於ける隨筆文化とでもいふものであらうか。著者の序文をもつと熱烈に詳細に綴つて、其の所謂「わが山わが溪を求め歩く心」を遠慮なく後輩に教へていただきかつた。最後に本書最後の一篇「庭園に似た原始境」を評者個人として興深く讀んだ事を附け加へて置かう。圖版は大部分著者の作、末尾に解説もあつて、かういふ種類の本にも似ず其の手堅さに敬意を表する次第である。妄言多謝。

臺灣山岳第十二號

昭和十七年二月二十七日社團法人臺灣山岳會發行、二二×一五種左横組一三〇頁、圖版寫眞一八、地圖三、一圓三十錢。

昭和十五年八月第十一號發行以來久し振りの「臺灣山岳」である

積雪期

木曾駒黒川本谷(上)

跡部 昌三

① 私達、名古屋山岳會の仲間のも
の、雪の木曾駒にスキーをかつ
ぎ込むやうになつてから、かなり
久しい月日がたつ。

大體に言つて、木曾駒のあの地
勢などからみて、例へ雪があるか
らとはいへ、其處にスキーを持
込むといふことは、相當に困難を
伴ふつらい仕事である。そしてそ
れば、その行に於て単に一台のス
キーの負擔のみにとゞまらず、そ
の自乗にも増す影響を覺悟してか
らねばならぬ勞作である。

雪の木曾駒を試るに、一般的に
はスキーを除外して營む方が、よ
り有利であり、賢明であり、能率
的であるかも知れぬ。昨年の二月
にオンボロ澤を登攀して、南駒を
横斷、木曾須原へ出たときなど、
途中天候のため豫定の下降ルート
を變更したのが原因してはあるけ
れど、五日間といふものは殆んど
スキーを擔ぎ通してある。併し、
斯うした苦しみなめてゐながら
も、私達は依然として雪の木曾駒
からスキーを離さうとはせず、更
に新しい境地をみい出して、スキ

ーをあてはめやうと努力せずには
ゐられない。

黒川本谷はスキー可能と思はれ
るルートの一つである。これは前
黒川發電所に勤務してゐられた唐
澤喜八氏が、曾つて吹雪く赤穂道

を述べたいと
思ふ。

即ち、日本山
岳會賞は、今年
に推奨すべき當
該物者が見當ら
なかつた。今後
次の様な項目を

日本山岳會賞について

(委員一同)

既に會報108號(昭和16年8月)に日本山岳會處務規定を發表し、
その第9條に、「日本山岳會賞」の交附及び實施方針を示した事であり
又當該規定の關係者の一人が、個人意見として、會報106號に「非爐
邊談話」といふ題の下に一文を草した事もあつた。然し今日は
本賞第1回の實て何回となつて公評議した結論*
条件として、特に第1回には慎重なる態度で、實施したいと考へてゐる。

(1) その年度に於て、登山界に最大の寄與を及ぼした事象發現
を見たるもの。

(2) 登山の實踐、研究、その他の事蹟が、明かに公表又は公認
されたもの。

支那事變について大東亞戰爭が勃發したので、此處暫くは外に動
く業障は期し得られないかも知れないが、我々にとつて、世界の最も
遠き巨大の山群も豫定的距離に迫りつゝあり、新しき指導精神の發揚
する科學と實務の分野は展開しつゝあり、此處に會員たると否とな問
はず、本邦斯界の目ざましき活躍に囑望し、第1回の日本山岳會賞を
意義あらしめたいと念する次第である。

昨年、私は兩三度この谷を歩い
てみて、スキールートの對象とし
て考へ、更に私達名古屋山岳會の
冬期鍊成合宿の候補地の一つに舉
げられるとともに、秋の偵察によ
つてその適當なることを認められ

まつた。

しかし、三月に入つて再び此處
に焦點が合はされ、福島道を登攀
して本岳を越え、そして黒川本谷
が滑降されるに至つた。

②

合宿期間は一月一日より五日ま
での五日間として、その行動は、
本隊は宮田道を進み、四合目少し
上の木地小屋を根據地に、更に
前進テントを設置、稜線近くに雪
洞を穿掘して寶剣岳に登頂、この
間、別班をして福島道から本岳を
越えさせしめ、これを雪洞にて迎え
此處にて新しく別班を編成して、
主稜を北進させ、根據地としてで
はなく縦走用とも言ふべき雪洞を
設置した上、内ノ萱道を滑降せし
め、本隊は往路を撤退、全員宮田
に集結する計畫をたてた。しかし
その後參加者の環境の急激な變化
から參加不能者が續出し、結局、
小島政、堀田、淺野、林、跡部の
五名の参加といふことになり、計
畫も縮小して、本隊の行動のみを
もつて合宿に臨むことに決定をみ
た。

一月一日の朝、宮田の寶剣小屋
の主、向山敬次郎氏宅に集合して
荷の整理などを終へ、九時三十分
に出發した。はつきりしない空模
様。ルートを駒ヶ根樂園道にとり
北に走る南尾根に出てから暫くし

が、體裁形式は前號と同じく、臺
灣山岳會報(月刊)が數年前右縦
組に變つたにも拘らず、本號も左
横組であるのはどういふ主張理由
であるか、同會先輩としても未だ
聞いてゐない。忌憚なく言へばも
つと大判の第九號の方が左横組雜
誌としては立派であると思ふ。

本號内容は本文、隨筆、文苑、
研究、雜錄及圖版と大別されて居
り、記錄文獻として下澤氏の「大
霸尖山よりキナジョー山稜を往く」
財津、安倍兩氏の「劍山・大劍山・
新高山縦走記」木田氏の「冬期南
湖大山行」の新局面及び霧頭山・
大武山連嶺の二度目の記録がある
然し一般的の讀物として小笠原氏
の「佛領印度支那の山々」と藤田
氏の「峠考」及び研究欄中の「冬
山遭難防止座談會」を挙げたい。
特に藤田氏の峠は通る事を示す言
葉に由來するといふ一新記と亞歐
諸民族語に其の關係を結び付けや
うとする考へ方を興味深く讀ん
だ。總じて前號あたりから見ると
ジャーナリズムの舊體制が一掃さ
れてある編輯振りを判然と見る事
が出来る。此の會及び此の機關誌
を初期に育んで來た評者が始め
て局外者の立場で紹介批評するも
のであるが、名利に拘泥せず遅々
たりとも確實永遠の進歩を續けら
れてゐる事を深く喜ぶと共に、更
に月刊物も亦數段と洗練されむ事
を祈つて止まない。(沼井生)

てスキーをばいた。樂園に十四時十分着、かなり時間を食はれてゐたので直ちにオツ越に至り、忠實に夏道を、四合目のあたりから背に返はれるやうにして十八時〇五分、木小屋の小屋にはいつた。二日、霏々として雪降り積むなかな十時、前進テント設置に小屋をあさにした。夏道通りに建設適地を物色しつゝ、辿り、十四時、二〇八〇米の地點にルツクザツクをおろし、テント建設。堀田、浅野林をテントに、小島政、跡部の兩名は、雪のなかな根據地へ引揚げて明日の行動に備へた。

三日、空は蒼穹。根據地を六時二十分に出發、テントのものと合し、前岳澤の出合を過ぎてから夏道をすて、本谷はまだ相當の流れを見せてゐたが、右岸、左岸と雪を傳つて進み、懸て積雪も多くなるにつれて穴のある事によつて流れを見る程度になり、暫くして兩岸が迫つて、十三時二十分、問題の大タルを前にした。三段にて五十米近くあり、黒川本流の唯一の瀧、前岳側からも細いが荒涼たる瀧が出合ひ、のんびりとした黒川にもこんなところがあるかといふ感じのするところである。大タルは、僅かであるがまだ落口を覗かせてゐたので、前岳側からの澤との尾根に取りついた。傾斜が

急でクラストしてゐてスキーがきかず、ぬいだものゝ胸近くまでもぐる深雪に、シヤベルで切り開いては踏みかためして、一時間半からのアルバイトの後これを登りきり、岳カンバのまばらな右岸の尾根状のところにスキーを進めた。間もなくして十五時を廻つたのに氣付き、二五〇〇米の地點に雪洞を掘ることにした。この日、晴れではあつたが風強く、高度がたか

高山深谷

送料共七圓八十錢

山日記

送料共一圓三十錢

右御入用の方は直接本會へ申込下さい。

められると、もに一層當りが烈しく、稜線に吹き上げられた雪煙は逆光にもえて火華の如く散つてゐた。この邊りには、今は岳カンバのみ點在するところ、中岳や本岳の水雪の鎧をつけた胸壁を間近に仰ぎみる聖境。本谷は再び和やかさをとりもどし、雪の窪となつてのびてゐた。雪洞の穿窟作業を終る頃は、月が雪洞真正面にあがつて、通路をあかるく照してゐ

た。

四日、夜半より天候が崩れ、完全に風雪の巷となつてゐた。恢復の見込みがたゞずして引揚げるに決し、九時三十分、雪洞を出た。大タルの部分を下つてからスキーをはいて滑降し、途中前進テントを徹收して根據地の小屋に、十四時三十分、歸着した。

五日、依然として雪はさかんに降り、積量も来た時とは見違える程となつてゐた。さきに根據地へ

前送してあつた裝備や食糧が、その後急に参加不能のものが出た、此處より完全に徹收するには各自の負擔は極量までなつた。小屋出發は九時、ラツセルを交代しつゝ、オツ越一三時〇五分、駒ヶ根樂園十四時十五分、登つて来たときより雪量はうんと増してゐたが樂園から暫くして、スキーには不適當なためぬいで下り、かなりピツチをあげたものゝまだ下り切らぬうちに暗くなり、向山氏宅に歸つて来たのは十九時であつた。

(以下次號)



川崎隆章編・足立源一郎装幀(近刊)

尾瀨と檜枝岐

原色版口繪 故大下藤次郎、故森田恒友、足立源一郎

尾瀨山小屋素描集 故田中保雄

アイト口繪 堂々九十五點の貴重寫真集

序に代へて 廣瀬 潔

第一部(故人)

渡邊千吉郎 田山花袋 早田文蔵
大下藤次郎 大町桂月 若山牧水

第二部

木暮理太郎 柳田國男 牧野富太郎
關口英太郎 安達成之 沼田中學校
群馬縣利根 水瀨探検隊 渡邊國造
足立源一郎 塚本閑治 前田夕暮 高橋文太郎
津田青楓 鍋本外枝雄 齋藤 木下立安
富田通雄 金子總平 深田久彌 矢島市郎
本田正次 茨木露之吉 田邊重治 三田尾松太郎
中川善之助 川崎 隆章

第三部(檜枝岐村)

星大 吉 星愛守 星美雄 平野才次郎
平野彌子 平野保一 蘇原武治(月倉) 平野長英
其他原色版口繪解説・寫真版口繪解説・編纂を了して、尾瀨近傍圖、檜枝岐村近傍圖、
AS版豪華本約六五〇頁、函は盛夏の太陽に輝く日光黄の群落、表紙は深麗を極める青藍色の雲に雪より白く輝く尾瀨の名花水芭蕉の大輪。用紙不足の折、確實に入手の爲、後編の御申込の方は出来次第詳細内容目録、定價、送料等を御通知申し上げます。

東京市京橋區銀座西六ノ五(瀧山町ビル三階)

那珂書店

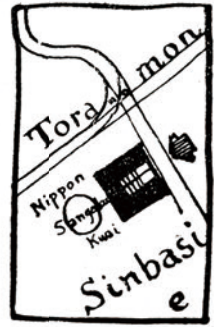
電話(銀座)三三三番・三二五番

東印度諸島 主要山岳高度表 Ⅱ

2. ジャバ 島

(山名は西より東へ取り上げ
ました。地図の中の番號は
山の順位の番號——吉 阪)

高度 順位	山 名	高度 (m)	備 考	高度 順位	山 名	高度 (m)	備 考
69	Karang	1778		14	Merapi	2911	
63	Halimoen I	1929		84	Moerjo I	1602	
72	" II	1750		87	" II	1522	
88	Gagak	1511		7	Lawoe	3265	
46	Salak	2211		86	Manjoetan	1555	
13	Pangrango	3019		33	Liman	2562	
15	Gede	2958		54	Limas	2162	Wilis 山脈
66	Kendeng	1852		52	Wilis	2169	
35	Patoeha	2434		81	Penanggoengan	1653	
68	Simpang	1805		8	Welisand	3156	
59	Tiloe	2040		5	Ardjoeno	3339	
39	Malsbar	2321		41	Andjamoso	2282	
50	Wajang	2182		49	Argowajang	2198	
50	Kantjana	2182		73	Kelbed	1731	
83	Poentjak Daoen	1603		25	Kawi	2651	
67	Mandalagiri	1813		18	Boetak	2868	
20	Tjikoeraj	2821		70	不 明	1771	
28	Panpandajan	2622		24	Penandjakan	2770	
30	Kendang	2608		29	Widodaren	2614	
65	Sanggar	1880		44	Tjiri	2233	
42	Goentoer	2249		36	Bromo	2392	
80	Mandalawangi	1663		31	Koersi	2581	Tengger 山脈
53	Galoenggoeng	2168		34	Iderider	2527	
48	Telagabodas	2201		27	Poendaklemboe	2635	
77	Sedakeling	1676		80	Krangean	1663	
74	Tjakraboewara	1721		21	Ajekajek	2819	
71	Sawal	1764		19	Koekoesan	2836	
79	Tjalantjang	1667		12	Kepoio	3035	Semeroe 山脈
56	Tangkoebanprahoe	2076		2	Mohomeroe	3676	
57	Boerangrang	2064		78	Taroeb	1671	
47	Boekittoenggoel	2209		85	Lamongan	1600	
76	Tampomas	1684		55	Saing	2103	
1	Tjareme	3678		17	Semeroe	2947	Ijang 山脈
3	Slamet	3428		11	Argopoero	3088	
82	Langit	1623		45	Pinggang	2225	
51	Ragadjembangan	2177		40	Tjemorokandang	2286	
60	Kendeng	2019		23	Krintjing	2773	
32	Praoe	2565		6	Raceng	3332	
37	Bismo(Dijeng臺地)	2365		16	Soeket	2950	
10	Soendoro	3135		38	Pendil	2338	
4	Soembing	3371		26	Rante	2644	Idjen 山脈
58	Cengaran	2050		22	Merapi	2800	
64	Telomojo	1894		62	Ringgih	1965	
9	Merbaboe	3142		61	Koekoesan	1994	
				75	Kendeng	1717	



會務報告

四月役員總會報告

4月9日19時、事務所にて開催
出席者 鳥山、藤島、武田、茨木
木村、金山、吉阪、富田、逸見
塚本、早川、沼井、交野（委任
十三名）

議題（議長・鳥山理事）

一、幹事候補者決定ノ件。繰内信
彦、海瀬榮一郎、兼松學、小原
勝郎ノ四氏何レモ内諾アリタル
旨ノ報告アリタリ。

一、昭和16年度收支決算報告。

鳥山理事ヨリ定期外ノ出版等ノ
爲、大體、收支相償ヒ得タル旨
報告。

一、新年度豫算編成方針ノ件。郵
税、印刷費等ノ費用騰貴ノ爲、
諸費節約ヲナスト共ニ增收ノ道
ヲ考究、次回マデニ豫算編成。

一、會員總會及講演會ノ件。5月
15日（金）日本商工俱樂部ニテ
開催。講師ハ小島三郎氏又ハ佐

々保雄氏。

一、山岳會賞ノ件。藤島評議員ヨ
リ委員會ノ決定ニツキ報告アリ

沼井評議員執筆會報ニ發表ノ事

一、山岳刊行ノ件。目下印刷中ト

逸見幹事ヨリ報告。
一、會報隔月發行ノ件。紙ノ配給
減少、郵税高騰等ノ爲當分隔月
發行ノコトトス。

一、關西支部報告。（富田幹事）支
部豫算額ハ前年通りトス。

一、圖書整理ノ件。（交野幹事）適
當ノ人ヲ備ヒ整理促進スル事。

一、入會申込者十三名承認。

圖書基金受入

四口金貳拾圓也 鈴木 弘

會員氏名改稱

横江ハインリッヒ（舊名H・シエ
イル）、歸化ニ付改名。

受贈圖書

武田久吉著「道祖神」（アルス發
行）右發行所

内田嘉吉記念事業委員

「内田嘉吉文庫稀觀書集覽」

多田等觀著「チベット」〔岩波新書〕

鈴木圭一著「上海」〔同〕

小椋廣勝著「香港」〔同〕

右田邊主計氏

三田尾松太郎著「幽山秘峽」
（富山房）右三田尾松太郎氏

關西支部報告

昨年度（十六・一十二）來室者數

月別	會員	外會	小計
1月	130	125	245
2月	75	86	161
3月	123	131	254
4月	143	128	271
5月	117	120	237
6月	128	130	258
7月	108	121	229
8月	98	105	203
9月	113	123	236
10月	114	148	262
11月	120	129	249
12月	118	130	248
計	1377	1476	2853

右の通増、集會利用回數六四回

關西支部受贈圖書

今回朋文堂及舊大阪山岳會より左
の通り多數圖書寄贈さる。深く厚
意を謝す（支部圖書係）

Kanchenjunga Adventure. Kanet
Corquered (F.S. Smythe) Story of
Everest (John Noel) First steps to
Climbing (G.D. Abraham) To the
Mountains (Anthony Bertam) Alp
ine Skiing at all Heights and Sea-
sors. Complete Ski-Running (Arnold
Lunn) Playground of Europe (Les
lie Stephen) Pure skating Techni-
que (H. D. J. White)

シュナイダーとアルベルグスキー

術（玉川學問體育部）アールベル

グスキー術（高橋次郎）モダニス

スキー術（酒井麟吾譯）北歐のスキ

ー術（内山數雄）山岳スキー（平

井左門）丘稜スキー術（吉川修七）

スキー登山（船田三郎）スキーの

新研究（中川新）氷と雪（加納一

郎）日本アルプス（愛場秋文）北

アルプス、尾瀬と鬼怒沼（武田久

吉）八ヶ岳火山群、日本南アル

プス（平賀文男）山の科學（原田

三夫）高山研究（河野齡藏）行爲

と夢想（荒井道太郎）山は生きた

（今井徹郎）登山（太田行藏）黒

部谿谷、双六谷、後立山連峰、破

片岩（冠松次郎）山水百記（田山

花袋）山岳めぐり（横井春野）パ

イプなくは（石川欣一）日本

山岳巡禮（北尾録之助）アルピニ

編輯後記

行進曲が辻々に鳴りわたる度に日本人の皆が新しい地理の講義を聴かなければならない。そしてとうとう日附變更線などといふ厄介なものを決めたのは誰だらうといふことさへ問題となつて來てしまつた。

東よ西よ、北だ南だと頭のつけ根がちぎれさうな目ま苦しさだの

に、時計の針は遠慮もなくカチカチと進んでしまつて、早く歴史を書いてくれなければ空白にしてとばしてゆくぞと益々心をあせらせてゐる。

しかし我々には身體は一つしかないし、今といふ時は二度と戻つて來ない。流行に誘惑されたり、時局に便乗したりせずに、じつくりと本來の目的に向つて邁進すべきときではあるまいか。

(吉阪記)

昭和17年6月26日 印刷納本
昭和17年6月30日 發行
頒價二〇錢

日本山岳會内

編輯者 吉阪隆正

發行所 日本山岳會

東京市芝區平町一(二層ビル)

電話芝四三二六四九

振替東京四八二九

印刷者 鈴木和男

印刷所 株式會社 鈴木商店

オカモトヤ

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本山岳寫眞叢書
塚本閔治編

奥秩父

大原始林と深奥な溪流に圍繞された奥秩父の神秘境は明快な塚本氏のカメラアイに依つて遺憾なくキヤツチされ、百餘枚の貴重な記録寫眞と、吉田浩堂、町田立穂兩氏の永年の實地踏査に依る詳細な記述と共に初めて數萬の奥秩父愛好家の前に公開された。我登山界最初の寫眞と文に依るガイドブックの出現。

本書に納められたコース

- ① 三峯より雲取山 ② 兩神山
③ 二子山 ④ 雲取山—白石山
⑤ 中津峽—三國峠—梓山
⑥ 梓山—十文字峠—甲武信岳
⑦ 甲武信岳—東澤 ⑧ 梓山—金峯山—野猿谷

總論・動植物・礦物・地質・案内

B6版 一三六頁・地圖九葉

定價 一圓八〇錢(送 一〇錢)

◇ 續 刊 ◇

白馬岳(七月刊)

雪の上信國境(十一月刊)

山と溪谷社の全編輯網を總力して編集されたスキー、登山のこゝなら何んでも解る大講座愈々近日發賣。

全六卷 隔月切行
B5版・美 行裝幀
足立源一郎裝幀
定價二圓二十錢(送一五錢)
全六卷 (十三圓二十錢)
=總目錄進呈=

用紙不足折部數に限りがありますから成
可く全巻御注文を願ひます。

東京市芝區
田村町6ノ4

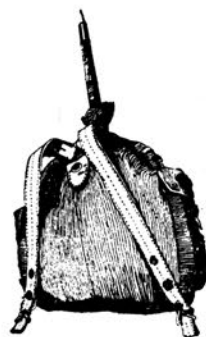
山と溪谷社

電話芝543
振替東京60249講 座
山 座
山と溪谷社編輯

製布水防麻

キスリング型(E式)

ルックサック



★品質優秀責任保證★

布地見本進呈

- 大型 二 尺 二七・六〇
中型 一尺八寸 二五・二〇
小型 一尺六寸五 二四・三六

●テルモス各種ハイキング用品

右は物品税二割を加へた改正値段です

御諒承下さい

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(三二一〇番)
振替口座東京九一八四番